



夕焼け通信

2020.1.27 1246号

編集 宮森健次

〒699-0823 島根県松江市西川津町4276-402
miyaken@me.com gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/

手作りの暮らし 2 39

木幡智恵美

ぬか漬け (3)



西 藏 旅 行 記

幸田和彦

6 (後)

昨日中国のどこかで大雨が降ったらしい。四時間遅れでラサを飛び立ち成都に着く。普通に呼吸するだけで生活できる空気がありがたかった。久しぶりのビールを飲みながら四川料理を腹一杯食べた。夜も安心してぐっすり眠られることを思うと嬉しかった。ホテルのユニットバスにひたりながら日本に帰ったら温泉に行こうと考えた。私のチベットの旅が終わった。短い時間ではあったが、信心深いチベットの人たちと触れ合うことができた。厳しい自然環境を感じる体験もできた。そんなチベットの旅を通じて、幸せとは自然と人と宗教が大切にされ、調和している生活ではないですかと語りかけられたような気がする。宗教に不慣れな私にはうまく咀嚼できないが、そんな幸福観を身近に感じることができたことは貴重な体験だった。一九八九年ノーベル平和賞を受賞したダライ・ラマ一四世はその記念講演で、人間一人ひとりの内的平和が世界の平和につながることを説いている。そして、チベットは非武装中立の仏教国となることで世界平和に貢献したいと述べていた。それからちょうど三〇年。チベットの人々のその願いと祈りは困難な社会情勢の中でもおもねることなく、迷うことなく続いていることを私なりに実感する旅となったように思う。お盆を迎えた仏壇に手を合わせ旅の無事をご先祖様に報告する。いつもの「南無阿弥陀仏」の代わりに「オムマニメメン」と唱えてみる。こつちの方がしつくりくるなあとチベット通ぶる自分がおかしかった。

(終)

熟れていないアジウリのぬか漬けは、ウリの漬物と変わらない味だった。アムスメロンは皮つきで漬けたせいか、皮が硬くて、口の中でごまごわした。ついでにキャベツも漬けたところ、すぐに漬かるし味も良かったけれど、ぬか床が水っぽくなってしまった。どこで仕入れた情報なのか、夫が、「またぬかを足していくんだよ」というので、ちょうどいい手触りになるまでぬかを足し、塩も少々入れて混ぜ、二日に一回はかき混ぜて冷蔵庫の野菜室に入れておいた。

遅くに苗を移植したスイカとアジウリが小さな実を付け、十月に入ってから夕飯のデザートとして寛大と実歩を喜ばせてくれた。その頃、畑では秋蒔きの野菜が育ってきていた。

散歩コースの一つに、近所の人たち数軒で育てている畑の脇を通るコースがある。そこは、去年の秋から、草ぼうぼうとなり、そのまま放置されていた。畑を作っていた人たちが高齢になり、草取りもままならなくなつて野菜作りをやめてしまったようだ。そこを通るたびに、大根の種が私に顔を向け、「私たちの子孫を残して」と語りかけてくる。このまま朽ちるよりもと、種の一つについている部分をいただき、持ち帰って鞘から取り出した。五十粒くらいはあつたらうか。それを、九月の初め、去年の残りの種を蒔いた畝の隣の畝に蒔いた。

スイカもアジウリも蔓が枯れ始めたころから、秋蒔きの野菜の世話が始まった。キャベツと白菜はネットをかけているから大丈夫だが、ブロッコリーの方にはアオムシがつき、行くとたびに十匹前後はつぶしていった。あとは、大根の間引きだ。間引き菜を浅漬けにし、細かく刻んでご飯にまぶして食べるのが、夫も義母も、娘の夫である忠ちゃんも大好きなので、毎年この時期には間引き菜を採る。去年の残りの種を蒔いた畝の大根の間引き、隣の畝の間引きにかかる。あれっ、根っこが赤い。ええっ、これ、カブじゃないか！

30代フリーター やあ、ジイさん。厚生労働省の発表によると、去年1年間の自殺者数は1万9959人（速報値）で、10年連続して減少し、統計を取り出してから初めて2万人割れしたと報じられている（1月17日朝日新聞デジタル）。1998年から14年連続して3万人を超えていた自殺者数がここまで減った理由は何だろう。

年金生活者 村上尚己というエコノミストが、アベノミクスの効果による失業率の低下をあげている（「日本の自殺者数はなぜ『激減』したのか？」、2017年2月24日DIAMOND online）。アベノミクスが開始した2013年から失業率の低下が顕著になり、それと平行して自殺者数も減り続けていると村上は指摘する。この見方はかなり正確と考えていい。

失業ほど人間の自尊心を損なう生活上の出来事はそうない。それがエスカレートすると、自分は社会に無用な人間ではないか、生きていても仕方がないのではないか、といった思い込みを

生む。今よく使われる言い方をすれば、承認欲求が満たされない心の飢餓状態に陥る。

それが自殺にまで行き着くことがあるのは、損なわれた自尊心の回復、言い換えれば承認欲求の充足を、死によつて一気に実現してしまおうという衝動が生まれるからだ。人間にとつて、死は生の個別性を脱して普遍性に移行することを意味する。普遍的であることは万人から認められることにはかならない。自殺はそれに向けた文字通りの命懸けの跳躍だ。

30代 アベノミクスの効果に着目したそのエコノミストの指摘は、安倍晋三が聞いたら大喜びしそうだ。

年金 村上の指摘には自殺の減少の理由をすべてアベノミクスの効果に帰せうとする一面性がある。彼が根拠としてあげている失業率の低下は民主党政権時代の2011年にすでに始まっているし、自殺者数もその前年の2010年から減少し出して、12年には3万人を割っている。したがって、アベノ

ミクスはそれ以前から始まっていた減少傾向に拍車をかけたというのがより正確だ。

だとしたら、自殺者が減った理由は失業率の低下以外にも求めなければならぬ。減少が始まったのは、失業率が下がり出す1年前であることがそれを物語っている。

考えられる理由のひとつは、自尊心の保持あるいは承認欲求の充足に、職があることが寄与する度合いが減ってきたことだ。言い換えれば、失業がかつてほど自尊心の損傷あるいは承認の遮断をもたらさなくなったということだ。この背景には資本主義とテクノロジの高度化が加速する富の稀少性の縮減がある。それはモノやサービスの無料化、低価格化を促し、失業してもある程度まで生活していける環境をつくりだした。

さらにもうひとつつけ加えるとしたら、SNSの普及をあげることができるといえるのに、自殺者が減っているのはどういうわけだ。

感じ合うのは、自尊心を保ち、承認欲求を満たす手取り早く方法ということが出来る。

30代 2万人を割るところまで減った年間の自殺者数が10年近く前までは14年間にもわたって3万人を超える状態が続いていたのはなぜだろう。

年金 東西冷戦の終結にともなう世界経済のデフレへの転換が雇用を不安定化させたことが背景にある。物価が下がり続けるデフレは労働力の価格も下げた。物価ほどの価格破壊はなかったものの、大規模なリストラ、終身雇用・年功序列賃金の見直し、非正規雇用の増加などの形をとつて労働者を襲った。

とりわけ中高年層は、それまで体にしみ込んでいた働き方の変更を迫られた。それは会社からお前はもう必要なくなつたと宣告されたに等しく、自尊心を損なわれ、承認欲求の充足を断たれる出来事となつた。自殺はそれを脱する最終手段として選ばれたと推察される。年齢別の自殺者数では中高年層

の増加がきわだつていた。

死を生誕の逆過程と考えれば、死の普遍性は胎児の状態としてイメージされる。母胎の宇宙と臍の緒でつながつた胎児は自身が宇宙でもあるからだ。そこに帰れば、情けない今の自分を脱して万能の自分に戻れるかもしれない。そんな無意識の想念が人を自殺に引き寄せることはあり得る。

ニュース日記 724 中村 礼治

自殺はなぜ増え、なぜ減ったか

30代 終身雇用・年功序列賃金の見直しや非正規雇用の増加は今のほうが進んでいるのに、自殺者が減っているのはどういうわけだ。

年金 現在の中高年層は、そうした雇用の現状を前提として就職した人たちが多い。人生に断層を生じさせるほどの働き方の変更を迫られることがなく、そのぶん自尊心の損傷も承認欲求の不満も感じなくて済んだと考えられる。

30代 民主党政権時代を悪夢だつたと言ふ安倍晋三に、自殺者の減少も失業率の低下もその悪夢の時代に始まつたということ聞かせてやりたいよ。

年金 その通りだとしても、アベノミクスが自殺者を減らすのに寄与した功績は認めないわけにはいかない。そうだとしたら、野党はアベノミクスを批判するだけでなく、そうしたい面に着目し、それをさらに拡大する方向で経済政策を打ち出さない限り、支持率はいつまでもたつても自民党には及ばない状態が続くだろう。